

〈論 説〉

共和政末期ローマにおける 執政官就任者と法学・弁論術・軍功

——法学者研究の後景——

林 智 良

〈目次〉

第一章 政治的成功と法学・弁論術・軍功——問題の所在

第二章 執政官就任者と法学・弁論術・軍功

第一節 調査の対象・手続き

第二節 執政官就任者個人のプロフィールと属性の判断根拠

第三節 執政官ポスト一覧と法学者・弁論家・軍人

第四節 集計データ

第三章 結果の分析

むすびにかえて

第一章 政治的成功と法学・弁論術・軍功——問題の所在

共和政末期ローマにおいて、法学の修得・実践、弁論術の修得・実践、軍事的功績の三つは、執政官 (consul) を頂点とする高位政務官職への就任にあらわされる政治的成功への有力なルートであると捉えられていた。もちろん、⁽¹⁾

(1) 共和政末期における政治的成功と政務官職就任の問題については拙著『共和政末期ローマの法学者と社会——変容と胎動の世紀——』（法律文化社、1997年）（以下、拙著と略記する）7-10頁も参照。なお、拙著末尾の文献目録兼略号表所収の文献については、ここで再び書誌データを記載せずに、その引用略号を用いていることをお断りしておきたい。未収録の文献については次のかたちで略記する。植松編「レトリック」=植松秀雄編『埋れていた術・レトリック』（木鐸社、1998年）、マルー「教育史」=H. I. マルー『古代教育文化史』（岩波書店、1985年）（H. I. Marrou, *Histoire de l'Éducation dans l'Antiquité* (Paris, 1948) の翻訳）、南川「教育」=南川

実際には公競技の提供や民衆への施しなども政治的成功を左右したし、何よりも出自・血統と有力者との庇護関係が極めて重要であったが、政治的成功を求める者たちの自助努力、とりわけ一定の知的体系（法学、弁論術）を修得し、それにもとづいて実務を行うことで社会的地位の向上をはかる余地があったことは、ローマ社会の大きな特徴であると考えられる。さて、当のローマ人自身によって、法学・弁論術・軍功が政治的成功への有力な道筋であったと捉えられていたことを、史料によって示しておこう。⁽³⁾

高志「ローマ人の社会と教育」(『ユスティティア①』(ミネルヴァ書房, 1990年) 所収), Atkinson=K. M. T. Atkinson, "The Education of the Lawyer in Ancient Rome", *South African Law Journal* 87 (1970), 31-59; David=J. M. David, *Le patronat judiciaire au dernier siècle de la République romaine* (Roma, 1992); Kiessling, QHFB=Q. *Horatius Flaccus Briefe* 9 Aufl., erklärt von A. Kiessling (n. p., 1970); Kodrebski=L. Jan Kodrebski, "Der Rechtsunterricht am Ausgang der Republik und zu Beginn des Prinzipats", ANRW II 15 (Berlin-New York, 1976); Rawson, ILL=E. Rawson, *Intellectual Life in the Late Roman Republic* (London, 1985); Sumner, OCB=G. V. Sumner, *The Orators in Cicero's Brutus: Prosopography and Chronology* (Toronto-Buffalo, 1973); Syme, RR=R. Syme, *The Roman Revolution* (Oxford, 1939); Wiseman, NMR=T. P. Wiseman, *New Men in the Roman Senate 139 B.C.-A.D. 14* (Oxford, 1971) など、歴史上著名であり、同定が容易な人物などについては、フル・ネームの記載と原文表記を一部省略した。

(2) Frier, RRJ, p. 142; Syme, RR, p. 374; OCD3, p. 291 柴田「概説」139, 222-224頁。

(3) Frier, RRJ, p. 142 以下にそれらの原文を挙げる。テキストはロウブ版に拠る。タキトゥス「年代記」の訳文は国原「年代記」(上)246頁に拠っており、その他を筆者が試訳した。その際ロウブ版の英訳とホラーティウスへのキースリンクの註解(Kiessling, QHFB, S. 41)を参考とした。"Ad summos honores alios scientia iuris, alios eloquentia, alios gloria militaris provexit." (Livius, 39, 40, 5) "non me more patrum, dum strenua sustinet aetas, praemia militiae pulverulenta sequi; nec me verbosas leges ediscere nec me ingrato vocem prostituisse foro?" (Ovidius, Am. 1, 15, 3-6) "Quae disciplina ac severitas eo pertinebat ut sincera et integra et nullis pravitatibus detorta unius cuiusque natura toto statim pectore arriperet artes honestas, et sive ad rem militarem sive ad iuris scientiam sive ad eloquentiae studium inclinasset, id solum ageret, id universum hauriret." (Tac. Dial. 28, 6) "mandabatque honores, nobilitatem maiorum, claritudinem militiae, inlustris domi artis spectando, ut satis constaret non alios potiores fuisse." (Tac. Ann. 4, 6, 2) "seu linguam causis acuis seu civica iura respondere paras

「ある者を法学が、ある者を弁論術が、ある者を軍事上の栄光が至高の公職へともたらした。」(リーウィウス「ローマ建国以来の歴史」)

「私が、父祖の習いに従って、塵にまみれた戦での褒賞を元気な時の続く限り追い求めたりすることもなく、また、冗長な法律に精通すること、不愉快な法廷で弁舌を切り売りすることもなかったことを……」(オウィディウス「恋の歌」)

「そこでの教育と厳しさは、次のようなことに関わっていた。つまり、純粋で、完全で、何らの誤りによってもゆがめられていないときの、子供一人一人のただ一つの素質が、直ちに名誉ある諸学芸に心から取りかかること。それが軍事的な事柄に傾こうと、あるいは法学、あるいは弁論術の修練に傾こうと、そのみを追い求め、そのすべてを広く十分に消化すること、これである。」(タキトゥス「弁論家に関する対話」)

「官職を授けるにあたって、ティベリウスは、それぞれの輝かしい戦績や、平和の華である才能〔弁論及び法学〕や高貴な血統を考慮した。それで、拔擢された人が最適任者であったということは、十分に肯定された。」(タキトゥス「年代記」)

「君が訴訟のために〔弁論の〕舌鋒をとぎあげようと、市民法を解答する準備をしようと、甘美な詩歌をつむごうと、君は勝利の鳶という第一の褒賞を手にする。」(ホラーティウス「書簡詩」)

これらは、いずれも共和政末期のローマ法学・法学者に関するフライヤーの記述において挙げられているものであるが、紀元前一世紀（以下、紀元前

seu condis amabile carmen, prima feres hederæ victricis præmia.” (Horatius, Epistulae, 1, 3, 23-25) 3つの経歴を対比させつつもっとも詳細に述べているのはキケロー「ムーレーナ弁論」(Cic. Pro Mur. 24 ff.)であるが、これについては拙著69-71頁で紹介・検討したので、本稿では繰り返さない。フライヤーは、法学と政治的成功を結びつけているキケロー史料として他にも De off. 2, 65; De orat. 1, 198を典拠に挙げているが、そのうち、「義務について」の記述については、拙著8-10頁も参照。

は省略)に生まれたリーウィウスが184年のこととして記した事柄から、紀元後一世紀に生まれたタキトゥスが、紀元後14年に始まるティベリウス帝の治世の間のこととして記した事柄まで200年間程度の幅があり、この通念が永らく存在していたことを思わせる。オウィディウスの記述では、これら三つの経歴が作詩に生きる作者の生き方の対極として描かれているようで、当時のローマにおける通念と作者の関係をうかがわせるが、それはひとまずおいて諸史料を一覧すると、この三つこそ公務と政治的成功を第一の生き甲斐とするべきローマ市民の理想の経歴として描かれていることは納得できよう。そもそも、修得に一定の努力と期間を必要とする体系的な学術として共和政期ローマに存在していたものは法学と弁論術に限られるわけではなく、数多くの学術の中で法学と弁論術が権力への道を拓く知識の体系として承認されていたことは興味深い現象である。⁽⁴⁾しかしここでは、とりあえずこの事実を認めた上で議論を進めることとしよう。

さて、筆者は法学者の政治的経歴を検討する過程でこの三つの経歴のあり方に触れる機会を得たが、⁽⁵⁾法学者研究の後景として、今一度これらの経歴の政治的優劣を具体的に検討してみる必要を覚えた。そのためには、政治的成功者として執政官に就任できた者のうち、何人が法学者であり、弁論家であり、軍人であるかの割合を知ることがまず第一歩であり、有益であると考えられる。個別の領域においては、法学者の研究に加えて、弁論術・弁論家の研究も近年進捗がめざましい。⁽⁶⁾しかし、筆者が法学者、弁論家、軍人を全体

(4) 例えば、筆者が今回検討の対象とする共和政末期についてローソンは、言語学・文法学、弁証法、弁論術、数学、医学、建築学関連分野、法学、歴史学関連分野、古事学、地理学・民族学、文学批評、哲学、神学・ト占学の諸分野を分けて論じている(Rawson, ILL, p. 117 ff.).

(5) 拙著 7-10, 22-23頁。

(6) 本稿では、法学・弁論術の実体的な内容に立ち入ることは避けており、法学者・弁論家の経歴の検討を主目的とする。弁論術自体の研究としては拙著23頁で挙げた諸文献(これ自体、決して網羅的なものではない)の後に、植松編「レトリック」が刊行されるなど、関心の大きな高まりが見られる。弁論家の経歴研究としては、キケローの「ブルトゥス」に現れる弁論家の血縁関係・人物同定や経歴を検討した Sumner, OCB があったが、より包括的な法廷弁論家研究としての David が近年

として比較検討しようとする際に導きとなる先行研究を見出すことができなかったことは事実である。その理由の一つとして、当時のローマにおいて學術の修得を公に認証し、権威づける制度的な枠組みが見られなかったことがあり得よう。つまり、同業者団体のメンバーシップが認められたり、教育機関の修了資格が認められたり、権威ある試験に合格したりすることで外面上他から区別する徴表が明らかでないのである。もちろん、法学・弁論術のそれぞれが当時高度な発達を遂げており、修得が容易でなかったことは周知の事柄である。しかしそれを公証するものは、まず同業者による認知と、ついで解答の場や法廷などにおける実務活動を通じての社会一般による認知にとどまったものと想像される。つまり、個々の法学者・弁論家の学識を担保するものは、究極的には制度化されないかたちで周囲がみとめる個々人の権威(auctoritas)であったと思われるのである。それゆえに、具体的に誰が法学者であり、弁論家、軍人であったかを認めるには「彼は弁論家として著名であった」などの言及を調べるしか方法がなく、判断基準の設定によってはそれぞれの集団が相当増減するおそれがあるのである。しかし、ダヴィドの労作をはじめとする近年の研究の成果を取り入れることで、一般的な傾向の把握という水準の試みであれば、これは充分実り多きものとなると思量する。そこで、これらの法学者・弁論家研究に加えて一般的な記述を頼りとしながら、対象・方法両面で次章に述べるような限定を設定しつつ筆者なりの概観を試みることにしよう。

第二章 執政官就任者と法学・弁論術・軍功

第一節 調査の対象・手続き

本節では、一般的な方針、法学者の認定方針、弁論家の認定方針、軍人の認定方針の順に述べて行こう。

の大きな収穫である。本稿ではダヴィドの議論全体を紹介することはできず、そのプロソポグラフィックなデータを利用することにとどまったが、これは、弁論家の社会史という観点からも検討と紹介に値する画期的な作品と評せよう。

まず一般的な方針である。調査対象は、99年から31年の間に執政官 (consul)、補欠執政官 (consul suffectus)、独裁官 (dictator) のいずれか (以下では、この三者を「執政官など」と略記する) に就任した人物153人とした。⁽¹⁾ これは、有力な参考書であるブロートンの『共和政ローマの政務官』(Broughton, MRR) の第2巻が対象とする時期であるが、拙著で検討した三人の法学者、神官クィントゥス・ムーキウス・スカエウォラ Quintus Mucius Scaevola Pontifex (95年執政官)、セルウィウス・スルピキウス・ルーフス Servius Sulpicius Rufus (51年執政官)、プブリウス・アルフェーヌス・ウェアールス Publius Alfenus Varus (39年補欠執政官) の軌跡の後景として見渡すのに適当な範囲であると判断したためでもある。執政官などのポストについては、まずブロートンの作品に準拠した。

検討事項は全部で5つあり、中心は法学者・弁論家・軍人のそれぞれであるか否かであるが、補助的に新人 (homo novus) であるか否か、横死者であるか否か (つまり、暗殺・戦死など不本意な死に方をしており、それが当時の内乱状況と相当な関係があるか否か) も記載した。⁽²⁾ これら5つの検討事項のそれぞれについてはすべて「全か無か」式に判断し、個々の人物の法学者・軍人・弁論家としての業績を測って、これを相互比較することは断念した。つまり、法学者・軍人・弁論家のいずれかであると判断するに十分な情報が得られたならば、それ以上に業績の再構成・評価は行っておらず、次節の個人データにも記載していない。いわば定量的な分析は断念し、定性的な分析に限定したことになる。全事項を通じた認定方針としては、それぞれの属性をできるだけ広く認める立場をとっている。なお、本稿では弁論家から法学者に転身するなどのケースについて、両者を同時に兼ねているケースと区別

(1) 執政官就任者は、実際に就任した者に限った。したがって、68年の補欠執政官就任前に死亡した Vatia (Broughton, MRR, 2, p. 137) と、31年の執政官に当選し、consul designatus となりながら就任することのなかったアントーニウスとのポスト (Broughton, MRR, 2, p. 419 f.) は、考慮外である。

(2) そのため、当然血縁関係と庇護関係については検討していない。なお、新人か否かの判断については、Wiseman, NMR, p. 203 の第5付表にそのまま拠った。

せず、それぞれ両方を認定している。そして本稿では、法学者・軍人・弁論家の2つ以上を同時に兼ねることがあり得るという立場をとっている。

法学者の認定については、クンケルの研究 (Kunkel, HSS) のそれに従った。弁論家の認定については、ダヴィドの研究に主に従ったが、彼の研究が法廷弁論家を対象としていることに鑑みてサムナーの研究や、有力な一般参考書としての『オックスフォード古典学辞典第3版』(OCD3)・『パウリ古事学事典』(RE) の見解を補充的に採用したケースもある。弁論術の修得または弁論家としての実務活動のいずれかを認められるものは弁論家と認めた。軍人の認定については、OCD3 と RE の記述を手がかりに、外征、内乱のいずれかへの従事を認定の基準とした。原則として両参考書のうちでは前者の記載を優先して扱った。横死者の判定についても、これら一般参考書の記述に拠った。

第二節 執政官就任者個人のプロフィールと属性の判断根拠

本節では執政官などに就任した者の個人別データを、氏族名 (nomen gentilicum, nomen gentile) の A B C 順に記載する。氏族名に続く番号は、RE での人物番号である。個々のデータは、以下の順序で記載する。(1)呼称 (Broughton, MRR における記載に従う)、(2)官職の種別及び就任年 (紀元前は省略し、正規執政官は “Cos.”, 補欠執政官は “Cos. suff.”, 独裁官は “Dict.” と表記する。), (3)法学者、弁論家、軍人、横死者と判断した理由、(4)特記事項、(5)典拠

(記号凡例)

O…弁論家	† …横死者
M…軍人	N…新人
I …法学者	

* Acilius16……M. Acilius M'. f. - n. Glabrio Cos. suff. 33 (Broughton,

MRR, 2, p. 414; RE, I, S. 253)

*Acilius38 (M, O)……M'. Acilius M'. f. M'. n. Glabrio Cos. 67 弁論家としての訓練は受けたが怠惰ゆえに昇進が遅れたという (Cic. Brut. 239; David)。執政官就任後、対ミトリダーテース戦を指揮して、これを労なくして終結。(Broughton, MRR, 2, p. 142 f.; OCD3, p. 8; RE, I, S. 256 f.; David, p. 756)

*Aemilius62……M'. Aemilius M'. f. - n. Lepidus Cos. 66 (Broughton, MRR, 2, p. 151; RE, I, S. 550 f.)

*Aemilius72 (M)……M. Aemilius Q. f. M. n. Lepidus Cos. 78 100年のサトゥルニウス L. Appuleius Saturninus らの叛乱に際しては元老院側に立って戦う (RE)。Cn. Pompeius Strabo のもとでの従軍など、軍歴多数 (OCD3)。(Broughton, MRR, 2, p. 85; OCD3, p. 20; RE, I, S. 554 f.)

*Aemilius73 (M)……M. Aemilius M. f. Q. n. Lepidus Cos. 46, 42 47年, Hispania ulterior での功績によって凱旋式を認められる (OCD3)。44年のカエサル之死にあたってはアントーニウスを軍事的に援助。(Broughton, MRR, 2, pp. 293 f., 357; OCD3, p. 20; RE, I, S. 556-561)

*Aemilius80 (M)……Mam. Aemilius Mam. f. - n. Lepidus Livianus Cos. 77 執政官として軍を指揮 (Cic. Pro Cluent. 99; Broughton, MRR, 3)。(Broughton, MRR, 2, p. 88; 3, p. 8; RE, I, S. 564)

*Aemilius81 (O)……L. Aemilius M. f. Q. n. Lepidus Paullus Cos. 50 63年にカティリーナ L. Sergius Catilina を、暴力行為に関するブラウティウス法によって告発する。(Broughton, MRR, 2, p. 247; OCD3, p. 22; RE, I, S. 564; David, p. 814 f.)

*Aemilius82 (M)……Paullus Aemilius L. f. M. n. Lepidus Cos. suff. 34 42年にクレータにて共和派の軍を指揮 (RE)。(Broughton, MRR, 2, p. 410; OCD3, p. 21; RE, I, S. 565 f.)

*Afranius6 (M, N, †)……L. Afranius A. f. Cos. 60 ポンペイウスの副官 (legatus) として、対セルトーリウス戦、対ミトリダーテース戦に従軍。

凱旋式挙行 (OCD3)。ファルサーロスの戦いの直後に P. Sittius に捕らえられ殺される (RE, S. 712)。なお、低い身分出身の「新人」。(Broughton, MRR, 2, p. 182 f.; 3, p. 13; OCD3, p. 33; RE, I, S. 710-712)

* Alfenus⁸ (I, N)……P. Alfenus P. f. Varus Cos. suff. 39 法学者であり、セルウィウスの弟子として著作多数。なお、OCD3 では補欠執政官就任に役だった経歴として軍事活動の可能性を示唆しているが、本稿ではこれをとらないこととする。(Broughton, MRR, 2, p. 386; OCD3, p. 63; RE, I, S. 1472-1474; Kunkel, HSS, S. 29)

* Antonius¹⁹ (M)……C. Antonius M. f. M. n. (Hibrida) Cos. 63 スッラ派とマリウス派の抗争にあたってはスッラのもとでギリシアにて従軍。他にカティリーナの陰謀に対しても軍事行動。(Broughton, MRR, 2, p. 165 f.; OCD3, p. 116; RE, I, S. 2577-2582)

* Antonius²³ (M, O)……L. Antonius M. f. M. n. (Pietas) Cos. 41 51年に不当利得罪 (repetundae) の科で A. Gabinius を、兄弟の Gaius と共同で告発 (David)。アントーニウスの副官としてムティナの戦いに従軍 (RE, S. 2585 f.)。41年に凱旋式挙行 (Broughton, MRR)。(Broughton, MRR, 2, p. 370 f.; OCD3, p. 117; RE, I, S. 2585-2590, David, p. 853 f.)

* Antonius²⁸ (M, O, †)……M. Antonius M. f. M. n. Cos. 99 キリキアの海賊征伐で凱旋式挙行 (RE, S. 2591)。同盟市戦争では副官として従軍 (RE, S. 2591)。弁論家として著名 (RE, S. 2591-2594; David)。87年にマリウス・キンナ派の手で虐殺される (OCD3; RE, S. 2591)。(Broughton, MRR, 2, p. 1; 3, p. 19 f.; OCD3, p. 114 f.; RE, I, S. 2590-2594; David, pp. 709-711)

* Antonius³⁰ (M, O, †)……M. Antonius M. f. M. n. Cos. 44, 34 かのアントーニウス。周知のごとく57年のパレスティナにおける従軍以来、軍功にて頭角を現す。RE では、弁論家としての専門教育などを受けてはいない旨の記述が見られるが (RE, S. 2612)、ダヴィドは彼を弁論家に含めており、本稿ではこれに従う。アクティウムの海戦に敗れ、30年に自殺したことは有名

な事柄。(Broughton, MRR, 2, pp. 315 f., 410; OCD3, p. 115 f.; RE, I, S. 2594-2614; David, p. 854 f.)

*Asinius25 (M, O, N)……Cn. Asinius Cn. f. Pollio Cos. 40 48年のファルサーロスの戦いで一軍を指揮するなど、軍歴多数。39年には凱旋式挙行。結果としては失敗に終わることとなるが、弁論家としては、54年の C. Porcius Cato 訴追が著名となるきっかけとなる (David)。(Broughton, MRR, 2, p. 378; OCD3, p. 192; RE, II, S. 1589-1602; David, p. 886 f.)

*Aufidius32……Cn. Aufidius Cn. f. - n. Orestes Cos. 71 (Broughton, MRR, 2, p. 121; RE, II, S. 2295 f.)

*Aurelius96 (O)……C. Aurelius M. f. - n. Cotta Cos. 75 P. Rutilius Rufus が92年に不当利得罪の科で告発された際に弁護人を務めたことを始め、弁論家として著名。(Broughton, MRR, 2, p. 96; OCD3, p. 222; RE, II, S. 2482 f.; David, p. 742 f. 拙著36頁)

*Aurelius102 (O)……L. Aurelius M. f. - n. Cotta Cos. 65 L. Manlius Torquatus と共に、執政官就任予定だった P. Autronius Paetus 及び P. Cornelius Sulla を66年に選挙不正行為 (ambitus) の科で訴追し、有罪に追い込むことで執政官に就任 (Broughton, MRR; RE)。(Broughton, MRR, 2, p. 157; OCD3, p. 222; RE, II, S. 2485-2487; David, p. 757 f.)

*Aurelius107 (M)……M. Aurelius M. f. - n. Cotta Cos. 74 執政官として、ミトリダーテース6世に対する Bithynia 防衛戦に出陣するも敗退。同僚執政官 L. Licinius Lucullus に救出された後、最後にはこの任務を完遂 (OCD3)。(Broughton, MRR, 2, p. 100 f.; OCD3, p. 222; RE, II, S. 2487-2489)

*Autronius6 (M)……L. Autronius P. f. L. n. Paetus Cos. suff. 33 28年にアフリカより凱旋式挙行。(Broughton, MRR, 2, p. 414; 3, pp. 33, 233; RE, II, S. 2612)

*Caecilius74 (M)……L. Caecilius C. f. Q. n. Metellus Cos. 68 ウェッレス C. Verres の後任としてシキリア属州を法務官代理 (propraetor) の立

場で模範的に統治。海賊と戦い、幸運にも彼らに島を明け渡させることに成功。(Broughton, MRR, 2, p. 137; RE, III, S. 1204 f.)

*Caecilius⁸⁶ (M, O)……Q. Caecilius Q. f. Q. n. Metellus Celer Cos. 60 80年に Q. Caecilius Metellus Nepos と共に M. Aemilius Lepidus をシキリア属州における悪政の科で告発するなど、弁論家として活動歴あり (David; RE, S. 1208 f.)。なお、この告発は後に取り下げ。66年にアジア属州でポンペイユスの副官として勤務し、そこでアルバーニー人の襲撃にあうも、これを撃退 (RE, S. 1209)。(Broughton, MRR, 2, p. 182 f.; OCD3, p. 268 f.; RE, III, S. 1208-1210; David, p. 818 f.)

*Caecilius⁸⁷ (M, O)……Q. Caecilius C. f. Q. n. Metellus (Creticus) Cos. 69 執政官就任後、執政官代理 (proconsul) としてクレタ島で海賊を平定し 62年に凱旋式挙行。81-80年に Sex. Roscius を弁護した可能性あり (David)。(Broughton, MRR, 2, p. 131; OCD3, p. 269; RE, III, S. 1210-1212; David, p. 758 f.)

*Caecilius⁹⁵……Q. Caecilius Q. f. Q. n. Metellus Nepos Cos. 98 (Broughton, MRR, 2, p. 4; RE, III, S. 1216)

*Caecilius⁹⁶ (M, O)……Q. Caecilius P. f. Q. n. Metellus Nepos Cos. 57 Q. Caecilius Metellus Celer と共に M. Aemilius Lepidus を告発する (ただし、後に取り下げ) など、弁論家として活動歴あり。おそらく 67-63年のあいだ、ポンペイユスの副官として海賊平定に従事する。(Broughton, MRR, 2, p. 199 f.; OCD3, p. 269; RE, III, S. 1216-1218; David, p. 819 f.)

*Caecilius⁹⁸ (M)……Q. Caecilius Q. f. L. n. Metellus Pius Cos. 80 107年にアフリカでの戦役にて初陣を飾り、同盟市戦争では Poppaedicus を破るなど、軍歴多彩。(Broughton, MRR, 2, p. 79; OCD3, p. 269; RE, III, S. 1221-1224)

*Caecilius⁹⁹ (M, O, †)……Q. Caecilius Q. f. Q. n. Metellus Pius Scipio Nasica Cos. 52 70年にウェッレースの弁護人として活動するなど、弁論家の経歴あり (RE, S. 1224)。48年のファルサーロスの戦いにポンペイユス派

として従軍するなど、執政官任期のあとに軍事活動 (OCD3)。46年にタブソスの戦いで敗北し、自殺 (RE, S. 1228)。 (Broughton, MRR, 2, p. 234 f.; OCD3, p. 270; RE, III, S. 1224-1228)

*Calpurnius28 (M, O)……M. Calpurnius C. f. - n. Bibulus Cos. 59 51-49年のシリア属州統治中に、部下が小さな勝利を収めたおかげで凱旋式を挙行。また、ポンペイウスのもとで49年より艦隊を指揮。キケローの、弁論家としての評価は高くない (Cic. Brut. 267; David)。 (Broughton, MRR, 2, p. 187 f.; OCD3, p. 279 f.; RE, III, S. 1368-1370; David, p. 822)

*Calpurnius63 (M, O)……C. Calpurnius - f. - n. Piso Cos. 67 Sex. Aebutius と A. Caecina の間の訴訟にて前者を弁護するなど (Cic. Pro Caec. 34 ff.; David) 弁論家歴があり、キケローの評価も高い (Cic. Brut. 239; David)。執政官勤務の翌年、翌々年とガッリア・ナルボーネンシス属州を統治し、そこで Allobroges 族の蜂起のころみを鎮圧 (Cic. Ad Att. 1, 13, 2; RE)。 (Broughton, MRR, 2, p. 142 f.; OCD3, p. 280; RE, III, S. 1376 f.; David, p. 782 f.)

*Calpurnius90 (M)……L. Calpurnius L. f. L. n. Piso Caesoninus Cos. 58 執政官就任後、シリア属州を担当した際に、部下の軍功ゆえに *imperator* の称号を得る (RE, S. 1388)。 (Broughton, MRR, 2, p. 193; OCD3, p. 281; RE, III, S. 1387-1390)

*Calvisius13 (M, N)……C. Calvisius C. f. - n. Sabinus Cos. 39 カエサルのもとで、ギリシアにて勤務したり48年に Aetolia に派遣されるなど、従軍歴多彩。 (Broughton, MRR, 2, p. 386; OCD3, p. 282; RE, III, S. 1411 f.)

*Canidius2 (M, N, †)……P. Canidius P. f. - n. Crassus Cos. suff. 40 41年の Perusia 攻囲戦に際して、おそらくアントーニウス側に立って従軍。その後も軍歴あり。31年のアクティウムの決戦においてもアントーニウスのために地上軍を指揮。そこで降伏し、処刑されるか自害する。 (Broughton, MRR, 2, p. 378 f.; OCD3, p. 285; RE, III, S. 1475 f.)

*Caninius4……L. Caninius L. f. - n. Gallus Cos. 37 (Broughton, MRR,

2, p. 395; 3, p. 49; RE, III, S. 1478)

*Caninius9 (M)……C. Caninius C. f. C. n. Rebilus Cos. suff. 45 カエサルのもとで52年の対ウェルキンゲトリックス Vercingetorix 戦に従軍。他にも49年にカエサルよりポンペイユスへの使者を務めるなど、多数の軍歴あり。(Broughton, MRR, 2, p. 305; OCD3, p. 285 f.; RE, III, S. 1478 f.)

*Carrinas2 (M)……C. Carrinas C. f. - n. Cos. suff. 43 Sex. Pompeius と対戦するため、45年にカエサルによって Hispania Ulterior 地方に派遣される。30年にガッリア属州を執政官代理として統治していた時に蛮族の撃退に成功した功績で28年に凱旋式挙行。(Broughton, MRR, 2, p. 337; RE, III, S. 1612)

*Cassius57……C. Cassius L. f. - n. Longinus Cos. 96 87年に Pompeius Strabo が病を得た時に反マリウス派の最高指揮権をゆだねられた可能性も RE の記述にて示唆されているが、本稿では軍事活動をしたものと扱わない。(Broughton, MRR, 2, p. 9; RE, III, S. 1726 f.)

*Cassius58 (M)……C. Cassius L. f. - n. Longinus Cos. 73 執政官勤務の翌年、執政官代理としてスバルタクスと戦い、ムティナの近傍で敗北する。(Broughton, MRR, 2, p. 109; RE, III, S. 1727)

*Claudius216……C. Claudius C. f. M. n. Marcellus Cos. 50 (Broughton, MRR, 2, p. 247; OCD3, p. 340; RE, III, S. 2734-2736)

*Claudius217 (M)……C. Claudius M. f. M. n. Marcellus Cos. 49 執政官勤務後、カエサルとの戦いに際しては、ポンペイユスのもとで艦隊を指揮 (OCD3)。(Broughton, MRR, 2, p. 256; OCD3, p. 340; RE, III, S. 2736 f.)

*Claudius229 (O, †)……M. Claudius M. f. M. n. Marcellus Cos. 51 56年にキケローの願いで彼と共にミロー T. Annius Milo を弁護 (Cic. Ad Q. fr. 2, 3, 1; RE, S. 2761)。他にも弁論家としての活動があり、弁論家として著名。45年に従者 Magius Cilo なる者に殺される (RE, S. 2764)。(Broughton, MRR, 2, p. 240 f.; OCD3, p. 341; RE, III, S. 2760-2764; David, p.

824)

*Claudius296 (M,†)……Ap. Claudius Ap. f. C. n. Pulcher Cos. 79 87年にカンパーニア地方で、法務官代理 (propraetor) として軍勢を指揮。76年にマケドニア平定中、死亡。(Broughton, MRR, 2, p. 82; OCD3, p. 342; RE, III, S. 2848 f.)

*Claudius297 (M, O)……Ap. Claudius Ap. f. Ap. n. Pulcher Cos. 54 75年に Terentius Varro を恐喝の科で訴追 (RE, S. 2849)。その後、姉妹の夫 Lucullus のアジア出征に随行。(Broughton, MRR, 2, p. 221; OCD3, p. 342; RE, III, S. 2849-2853; David, p. 825)

*Claudius298 (M, O)……Ap. Claudius C. f. Ap. n. Pulcher Cos. 38 カエサルとポンペイウスとの戦いでは、おそらくポンペイウス側に立って従軍 (RE; Broughton, MRR, 3)。執政官職の後にヒスパーニア属州を統治して、軍事的に成功したため32年に凱旋式を挙行。弁論家としては、52年に同名の弟と共にミローを訴追。(Broughton, MRR, 2, p. 390; 3, p. 57; RE, III, S. 2853 f.; David, p. 890)

*Claudius302 (O)……C. Claudius Ap. f. C. n. Pulcher Cos. 92 キケローによって弁論家の才を認められる (Cic. Brut. 166; David)。(Broughton, MRR, 2, p. 17; RE, III, S. 2856; David, p. 712 f.)

*Cocceius3 (M, N)……C. Cocceius - f. - n. Balbus Cos. suff. 39 imperator の称号を帯びており、おそらくアントーニウスのもとで従軍か (Broughton, MRR, 2, p. 482)。(Broughton, MRR, 2, pp. 386, 482; RE, IV, S. 129; Supb. VII, S. 90)

*Cocceius13 (M, N)……M. Cocceius - f. - n. Nerva Cos. 36 41年の Perusia 攻囲戦で L. Antonius 側について戦うも、その後オクターウィアヌスにより赦免される。(Broughton, MRR, 2, p. 399; OCD3, p. 354; RE, IV, S. 131)

*Coelius12 (M, O, N)……C. Coelius C. f. C. n. Caldus Cos. 94 おそらく99年の法務官在職時に Hispania Citerior 属州を統治し、その際 Salluvii

族をガッリア・トランスアルピーナ地方で征伐した可能性あり (Broughton, MRR, 3, p.60)。弁論家として著名 (Cic. Brut. 165; De or. 1, 117; RE)。なお、新人として政治的成功に苦勞した。(Broughton, MRR, 2, p. 12; OCD3, p. 355; RE, IV, S. 195 f.; David, p. 713 f.; Wiseman, NMR, pp. 203, 225)

*Cornelius32……L. Cornelius - f. - n. (Cinna) Cos. suff. 32 なお、44年にアジアまで騎兵500騎を率いた、Cinna なる人物 (Cornelius104) と同一人物である可能性も RE の記述において示唆されているが、本稿ではこれをとらない。(Broughton, MRR, 2, p. 417; RE, IV, S. 1256, 1282)

*Cornelius69 (M, O, N)……L. Cornelius L. f. Balbus Cos. Suff. 40 77年から71年にかけてセルトーリウスとの戦いに従軍したことにはじまる多彩な軍歴 (RE, S. 1261)。選挙不正行為での告発に成功するなど、弁論家としても活躍 (David)。なお、外国で生まれた初の執政官。出身は同盟市の Gades でありながら、72年にローマ市民権を取得 (OCD3)。(Broughton, MRR, 2, p. 378 f.; 3, p. 63; OCD3, p. 392; RE, IV, S. 1260-1268; David, p. 829)

*Cornelius106 (M, †)……L. Cornelius L. f. L. n. Cinna Cos. 87, 86, 85, 84 かのキンナ。88年に同盟市戦争に従軍。その後の内乱の中心人物であることは、周知の事柄。84年に自軍の叛乱にあって殺される (OCD3)。(Broughton, MRR, 2, pp. 45 f., 53, 57, 60; OCD3, p. 393; RE, IV, S. 1282-1287)

*Cornelius134 (M)……Cn. Cornelius Cn. f. Cn. n. Dolabella Cos. 81 スッラのもとで東方にて従軍し、艦隊を指揮。執政官を務めた後マケドニア属州を統治して、78年に帰還・凱旋式挙行。(Broughton, MRR, 2, p. 74; OCD3, p. 393; RE, IV, S. 1297)

*Cornelius141 (M, O, †)……P. Cornelius P. f. - n. Dolabella Cos. suff. 44 カエサルのもとで従軍歴があり、49年には艦隊を指揮中に失敗 (まず OCD3 を参照)。弁論家としては、50年に Ap. Claudius Pulcher を大逆罪及び選挙不正行為の科で告発するも、失敗 (David)。43年にシリアにて C.

Cassius Longinus に包囲されて自殺。(Broughton, MRR, 2, p. 317; OCD 3, p. 393 f.; RE, IV, S. 1300-1308; David, p. 892)

*Cornelius178……Cn. Cornelius Cn. f. Cn. n. Lentulus Cos. 97 (Broughton, MRR, 2, p. 6; RE, IV, S. 1361)

*Cornelius197……L. Cornelius - f. - n. Lentulus Cos. suff. 38 なお, Cornelius219 に関する記述 (RE, S. 1384) も参照。(Broughton, MRR, 2, p. 390; RE, IV, S. 1372, 1384)

*Cornelius216 (M, O)……Cn. Cornelius Cn. f. - n. Lentulus Clodianus Cos. 72 おそらく Cn. Pompeius Strabo のもとで従軍歴あり (まず OCD3 を参照)。執政官在任中にスパルタクスの叛乱を鎮圧しようとして失敗。なお, 弁論家としての彼に対するキケローの評価は高くない (Cic. Brut. 234; David)。(Broughton, MRR, 2, p. 116; OCD3, p. 395; RE, IV, S. 1380 f.; David, p. 760 f.)

*Cornelius218 (M, O, †)……L. Cornelius P. f. - n. Lentulus Crus Cos. 49 77年に始まったセルトーリウスに対するポンペイユスの戦いにもすでに従軍か (RE を参照)。執政官在職中にアジアで2軍団をポンペイユスのために調達し, 後述のごとくファルサーロスの戦いにも参加。弁論家としては, 61年に P. Clodius Pulcher を Bona Dea 祭を冒瀆した科で告発したことをはじめ, 法廷, 元老院で弁論の才を発揮 (David; RE)。RE では弁論家と認めてはいないが, 本稿ではダヴィドの同定に従う。48年のファルサーロスの戦いに際しては, ポンペイユス方で従軍。エジプトに敗走し, 捕らえられる。プトレマイオス王の指令でポンペイユスの死の翌日に殺される。(Broughton, MRR, 2, p. 256; 3, p. 67; OCD3, p. 395 f.; RE, IV, S. 1381-1384; David, p. 830)

*Cornelius228 (M, O)……Cn. Cornelius P. f. - n. Lentulus Marcellinus Cos. 56 Cyrene 沿岸にて海賊征伐 (Broughton, MRR, 3, p. 68)。弁論家としては, 70年のウェッレースに対する裁判においてシキリア住民の代理を務めるなど活動歴あり (David)。(Broughton, MRR, 2, p. 207; 3, p. 68;

OCD3, p. 396; RE, IV, S. 1389 f.; David, p. 830 f.)

*Cornelius238 (M, †)……P. Cornelius P. f. Cn. n. Lentulus Spinther Cos. 57 カティリーナの陰謀鎮圧に参加 (RE, S. 1394)。執政官を務めた後キリキア属州を統治し、そこから51年に凱旋式を挙げて imperator の称号を帯びる (OCD; RE, S. 1396)。ファルサーロスの戦いに従軍後、まもなく死亡。おそらくカエサルにより処刑か (まず OCD3 を参照)。(Broughton, MRR, 2, p. 199 f.; OCD3, p. 396; RE, IV, S. 1392-1398)

*Cornelius240 (O, †)……P. Cornelius P. f. P. n. Lentulus Sura Cos. 71 弁論家とされるが、キケローによる弁論家としての評価は高くない (Cic. Brut. 235; David)。カティリーナの陰謀に加担して絞殺される (RE, S. 1401)。(Broughton, MRR, 2, p. 121; OCD3, p. 396; RE, IV, S. 1399-1402; David, p. 761)

*Cornelius272 (†)……L. Cornelius - f. - n. Merula Cos. suff. 87 マリウス・キンナ派の恐怖支配のもとで自殺。(Broughton, MRR, 2, p. 47; OCD3, p. 396; RE, IV, S. 1407 f.)

*Cornelius338 (M, O)……L. Cornelius L. f. L. n. Scipio Asiaticus (Asia-genus) Cos. 83 88年に法務官としてマケドニア属州とアカイア属州を統治したが、その際 Scordisci 族を撃退 (RE, S. 1484に拠ることとし, Broughton, MRR, 2, p. 58 には拠らない)。弁論家としての彼をキケローは評価 (Cic. Brut. 175; RE, S. 1485)。(Broughton, MRR, 2, p. 62; RE, IV, S. 1483-1485)

*Cornelius392 (M)……L. Cornelius L. f. P. n. Sulla (Felix) Cos. 88, 80 Dict. 82, 81, 80, 79 かのスッラ。ユグルタ戦争におけるマリウス配下での従軍に始まる著名な戦歴は周知の事柄 (OCD3, p. 400; RE, S. 1523 ff.)。(Broughton, MRR, 2, pp. 39 f., 66 f., 74-76, 79, 82; OCD3, p. 400 f.; RE, IV, S. 1522-1566)

*Cornelius……P. Cornelius P. ? f. - n. Scipio ? Cos. suff. 35 (Broughton, MRR, 2, p. 406)

*Cornificius5 (M, O)……L. Cornificius L. f. Cos. 35 52年にミローを、選挙不正行為に関するポンペイユス法に基づき告発したことをはじめ、弁論家として活動 (David)。オクターウィアーヌスと Sex. Pompeius との戦いにおいて、38年に艦隊を指揮。その後アフリカ属州を統治し、そこから凱旋式を挙行 (RE)。(Broughton, MRR, 2, p. 406; OCD3, p. 401; RE, IV, S. 1623 f.; David, p. 893 f.)

*Didius5 (M, N, †)……T. Didius T. f. Sex. n. Cos. 98 法務官在任時に、マケドニア属州において Scordisci 族に勝利。その年代は Broughton, MRR, 1, p. 571 によれば、遅くとも101年か。101年と93年に凱旋式を挙行。同盟市戦争に従軍中、89年に戦死 (RE, S. 409)。(Broughton, MRR, 2, p. 4; 3, p. 81; OCD3, p. 466; RE, V, S. 407-410)

*Domitius21 (O)……Cn. Domitius Cn. f. Cn. n. Ahenobarbus Cos. 96 104年、平民トリブヌス任時に M. Aemilius Scaurus を祭祀放棄の科で訴追するも失敗。グウィドは彼を弁論家に数えていないが、ここではサムナーの見解に従った。(Broughton, MRR, 1, p. 559; 2, p. 9; OCD3, p. 492; RE, V, S. 1324-1327; Sumner, OCB, pp. 20, 97-100)

*Domitius23 (M, O)……Cn. Domitius L. f. Cn. n. Ahenobarbus Cos. 32 44年から42年にかけて、三頭官に反抗する立場から艦隊を指揮。その後ブルンディシウム協約の前までにアントーニウスのもとに転じ、その後もアントーニウスのもとで従軍歴あり (まず OCD3 を参照)。弁論家としては、50年に Cn. Appuleius Saturninus を訴追 (David)。(Broughton, MRR, 2, p. 417; OCD3, p. 492; RE, V, S. 1328-1331; David, p. 894)

*Domitius26 (M, †)……L. Domitius Cn. f. Cn. n. Ahenobarbus Cos. 94 100年に閥族派の一員としてサトゥルニウスらに武力行使 (Cic. Rab. perd. 21; RE)。82年に小マリウスらにより虐殺される (RE)。(Broughton, MRR, 2, p. 12; RE, V, S. 1333 f.)

*Domitius27 (M, O, †)……L. Domitius Cn. f. Cn. n. Ahenobarbus Cos. 54 執政官職を務めた後にはポンペイユス派に加わり、カエサルに軍事的に

対抗した。48年のファルサーロスの戦いにおいて、逃亡しようとして死亡。弁論家としては、徴税請負人が73年に Oropos 市を訴えた事件で原告側の代理を務める (David; RE, S. 1334)。 (Broughton, MRR, 2, p. 221; OCD3, p. 492; RE, V, S. 1334-1343; David, p. 832)

*Domitius43 (M)……Cn. Domitius M. f. M. n. Calvinus Cos. 53, 40 53 年の執政官職勤務の後、カエサルとポンペイユスの間の内戦ではカエサル側につき、48年には2軍団他を率いて、Q. Caecilius Metellus Pius Scipio と対戦する。その後ファルサーロスの戦いにも参加するなど、軍歴多数。39年から36年にヒスパーニアの全属州を過酷に統治し、imperator の称号をえて36年に凱旋式を挙行。 (Broughton, MRR, 2, pp. 227 f., 378; OCD3, p. 492; RE, V, S. 1316-1318, 1419-1424)

*Fabius108 (M, O)……Q. Fabius Q. f. Q. n. Maximus Cos. suff. 45 46 年にヒスパーニアにてカエサル麾下の軍勢を指揮し、その後45年に凱旋式を挙行。弁論家としては59年に C. Antonius を不当利得罪で訴追。 (Broughton, MRR, 2, p. 304 f.; RE, VI, S. 1791 f.; David, p. 833)

*Flavius18……L. Flavius - f. - n. Cos. suff. 33 (Broughton, MRR, 2, p. 414; RE, VI, S. 2528)

*Fonteius20……C. Fonteius C. f. - n. Capito Cos. suff. 33 (Broughton, MRR, 2, p. 414; RE, VI, S. 2847)

*Fufius10 (M, N)……Q. Fufius Q. f. C. n. Calenus Cos. 47 ガッリア戦役や内乱時、カエサルのもとで従軍。カエサルの死後はアントーニウスのもとで従軍。 (Broughton, MRR, 2, p. 286; OCD3, p. 613; RE, VII, S. 204-207)

*Gabinus11 (M)……A. Gabinus A. f. - n. Cos. 58 ポンペイユスのもとで、副官として65年か64年頃に東方遠征に従軍 (RE, S. 426)。その後も軍歴多数。なお、この人物が、スッラのもとで軍事トリブヌスとしてミトリダーテース戦争に従事した A. Gabinus なる人物 (Gabinus10; RE, VII, S. 424) と同一か否かの議論があり、OCD3 におけるバディアンと Broughton,

MRR, 3, p. 97におけるプロートンとは肯定し, RE におけるミュンツァーは否定するが, この問題には立ち入らない。(Broughton, MRR, 2, p. 193; 3, p. 97; OCD3, p. 618; RE, VII, S. 424-430)

*Gellius17 (M, O)……L. Gellius L. f. L. n. Publicola Cos. 72 同盟市戦争において, Cn. Pompeius Strabo のもとで従軍。また, ポンペイユスのもとで海賊征伐 (OCD3)。弁論家としては, 74年に M. Octavius Ligus を相続事件において弁護 (David)。(Broughton, MRR, 2, p. 116; OCD3, p. 628; RE, VII, S. 1001-1003; David, p. 727 f.)

*Gellius18 (M, †)……L. Gellius L. f. L. n. Publicola Cos. 36 31年のオクタウィアヌスとアントーニウスの決戦では, アントーニウス側に立って艦隊を指揮する。このとき戦死か (RE, S. 1005)。(Broughton, MRR, 2, p. 399; RE, VII, S. 1003-1005)

*Herennius10 (O)……M. Herennius M. f. - n. Cos. 93 キケローの評価によれば, 弁論家として凡庸 (Cic. Brut. 166; RE)。なお, ダヴィドは弁論家に含めていないが, サムナーの扱いに準じて弁論家として本稿で扱う。

(Broughton, MRR, 2, p. 14; RE, VIII, S. 664; Sumner, OCB, p. 20)

*Herennius13……M. Herennius (M.? f. T.? n. Picens?) Cos. suff. 34 (Broughton, MRR, 2, p. 411; RE, VIII, S. 664)

*Hirtius2 (M, O, N, †)……A. Hirtius A. f. - n. Cos. 43 54年頃からカエサルのもとで勤務し, 50年にはポンペイユスへの使節を務め, 内乱時にはヒスパーニアとギリシアにて従軍。他にも戦歴多数。キケローより弁論術の講義を受ける (RE, S. 1957)。キケローの甥を弁護 (RE, S. 1958)。現役の執政官としてアントーニウス軍に対して攻撃中にムティナにて戦死。(Broughton, MRR, 2, pp. 334-336; OCD3, p. 712; RE, VIII, S. 1956-1962; David, pp. 391-398)

*Hortensius13 (M, O)……Q. Hortensius L. f. - n. Hortalus Cos. 69 90年には見習将校 (contubernalis), 89年には軍事トリブヌスとして同盟市戦争に従軍 (RE, S. 2470)。キケローと並んで, もっとも著名な法廷弁論家

(David; RE, S. 2470 ff.). (Broughton, MRR, 2, p. 131; OCD3, p. 728; RE, VIII, S. 2470-2481; David, pp. 763-766)

*Iulius131 (M, O, †)……C. Iulius C. f. C. n. Caesar Cos. 59, 48, 46, 45, 44 Dict. 49, 48, 47, 46, 45, 44 かのカエサル。その赫々たる軍歴はあまりにも著名。弁論家としても Cn. Cornelius Dolabella を77年に, C. Antonius Hybrida を76年に訴追するなどで70年代に名声を確立 (David, p. 836; OCD3, p. 780)。弁論家としての名声については, まず David pp. 836-839; OCD3, p. 782; RE, S. 260-262を参照。彼が44年に暗殺されたことも周知の事柄。(Broughton, MRR, 2, pp. 187 f., 256 f., 272, 286, 293-295, 304-306, 315-318; OCD3, pp. 780-782; RE, X, S. 186-275; David, pp. 836-839)

*Iulius132 (M, O)……C. Iulius C. f. C. n. Caesar Cos. suff. 43 Cos. 33, 31-23, 5, 2 かのオクターウィアヌスで, 後のアウグストゥス。31年のアクティウムの海戦など, 多数の軍歴は周知の事柄。弁論術は M. Epidius より学ぶ。9才の時に公の場で弁論を行い注目を受ける (RE, S. 278)。(Broughton, MRR, 2, pp. 336, 413 f., 420; OCD3, pp. 216-218; RE, X, S. 275-381)

*Iulius142 (M, †)……L. Iulius L. f. Sex. n. Caesar Cos. 90 100年にサートゥルニウスらに対する戦いに参加。執政官在職時に, 同盟市戦争に従軍し, Papius Mutilus に対する戦いを指揮して勝利する。imperator 称号を与えられる (RE, S. 467)。87年にマリウスがローマを占領した際に殺される (OCD3)。(Broughton, MRR, 2, p. 25; OCD3, p. 783; RE, X, S. 465-468)

*Iulius143 (M)……L. Iulius L. f. L. n. Caesar Cos. 64 58年から51年にかけてのカエサルのガッリア戦役に従軍 (まず OCD3 を参照)。(Broughton, MRR, 2, p. 161; OCD3, p. 783; RE, X, S. 468-471)

*Iulius151 (M)……Sex. Iulius C. f. L.? n. Caesar Cos. 91 100年のサートゥルニウスらに対する戦いに参加 (RE)。執政官を務めた後, 執政官代理として同盟市戦争鎮圧のため Picenum の都である Asculum Picenum に派遣され, 攻囲戦を開始するが, 彼の地で病死 (RE)。(Broughton, MRR, 2,

p. 20; RE, X, S. 476 f.)

*Iunius46 (M, O)……D. Iunius D. f. M. n. Brutus Cos. 77 100年のサートゥルニヌスらに対する戦いに参加 (RE)。キケローによってギリシア・ラテンの教養に通じた人物とされるが、弁論実務に従事した具体的な記録は残されていない (Cic. Brut. 175; RE)。(Broughton, MRR, 2, p. 88; RE, X, S. 968; David, p. 730)

*Iunius163 (O)……D. Iunius M. f. - n. Silanus Cos. 62 キケローにより、中庸な弁論能力の持ち主として称揚される (Cic. Brut. 240; RE)。ダヴィドは弁論家に含めていないが、ここでは RE とサムナーの記述に従う。(Broughton, MRR, 2, p. 172 f.; OCD3, p. 789; RE, X, S. 1090 f.; Sumner, OCB, pp. 25, 129)

*Laronius2 (M, N)……Q. Laronius Cos. suff. 33 36年にアグリッパ M. Vipsanius Agrippa により、オクターウィアヌスと L. Cornificius 救援のために3軍団とともに派遣される。imperator 称号を受ける。(Broughton, MRR, 2, p. 414; RE, XII, S. 876)

*Licinius55 (M, O, I)……L. Licinius L. f. C. n. Crassus Cos. 95 100年のサートゥルニヌスらに対する戦いに参加 (RE, S. 258)。弁論家として大変有名な人物で、119年の P. Papirius Carbo 訴追に始まる経歴は著名 (David)。P. Mucius Scaevola 及び Q. Mucius Scaevola Augur に法学を学ぶ。(Broughton, MRR, 2, p. 11; OCD3, p. 857; RE, XIII, S. 252-268; David, pp. 714-716; Kunkel, HSS, S. 18)

*Licinius61 (M, †)……P. Licinius M. f. P. n. Crassus Cos. 97 100年のサートゥルニヌスらへの戦いに参加 (RE, S. 288)。96-93年に Hispania ulterior 属州を統治して凱旋式を挙行。同盟市戦争にも L. Iulius Caesar のもと従軍 (RE, S. 289)。マリウス派の勝利後に自殺 (RE, S. 290)。(Broughton, MRR, 2, p. 6; OCD3, p. 858; RE, XIII, S. 287-290)

*Licinius68 (M, O, †)……M. Licinius P. f. M. n. Crassus Cos. 70, 55 スッラのもとで従軍し、83年のローマ市奪還に貢献。他にも72-71年にかけて

スパルタクスの叛乱を鎮圧するなど軍歴多数（まず OCD3 を参照）。弁論家としても著名であり、66年に C. Licinius Macer の不法利得罪に関わる裁判で彼を弁護し、63年に L. Licinius Murena の選挙不正行為についての裁判でも弁護するなど、活動歴あり（まず David を参照）。パルティアとの戦争に従軍中、53年に戦死。（Broughton, MRR, 2, pp. 126, 214 f.; OCD3, p. 857 f.; RE, XIII, S. 295-331; David, pp. 766-768）

*Licinius104 (M, O)……L. Licinius L. f. L. n. Lucullus Cos. 74 同盟市戦争にスッラのもとで従軍するなど、戦歴多数。63年に凱旋式挙行 (OCD3)。弁論家としては M. Terentius Varro Lucullus と共同で C. Servilius Vatia を不当利得罪の科で告発するなどの実績あり（まず David を参照）。

（Broughton, MRR, 2, p. 100 f.; OCD3, p. 859; RE, XIII, S. 376-414; David, p. 745 f.）

*Licinius109 (M, O)……M. Terentius M. f. - n. Varro Lucullus Cos. 73 スッラの東方遠征に従軍し、その後もスッラに従う (OCD3)。71年に凱旋式挙行 (RE, S. 417)。L. Licinius Lucullus と共同で C. Servilius Vatia を不当利得罪の科で告発 (David)。（Broughton, MRR, 2, p. 109; OCD3, p. 1485; RE, XIII, S. 414-418; David, p. 753 f.）

*Licinius123 (M)……L. Licinius L. f. L. n. Murena Cos. 62 83-81年に、父親の L. Licinius Murena に従ってアジアで従軍したことを手始めに多彩な軍歴（まず OCD3 を参照）。（Broughton, MRR, 2, p. 172 f.; OCD3, p. 859; RE, XIII, S. 446-449）

*Lutatius8 (M, O)……Q. Lutatius Q. f. Q. n. Catulus Cos. 78 100年に同名の父とともにサートゥルニウスに対する戦いに従事。同じく父とキンブリ族に対する戦いや同盟市戦争に従事したものと推測される (RE, S. 2082)。弁論家としては中庸の存在であったとキケローは評価 (Cic. Brut. 133, 222; David; RE, S. 2093)。73年にカティリーナの近親婚に関する訴訟で彼を弁護 (David)。（Broughton, MRR, 2, p. 85; OCD3, p. 893; RE, XIII, S. 2082-2094; David, p. 748）

*Manlius79 (M, O)……L. Manlius L. f. - n. Torquatus Cos. 65 84-81年に財務官代理 (proquaestor) としてスッラのもとで従軍 (David; RE, S. 1200)。なお、64年に執政官代理としてマケドニア属州を統治し、imperatorの称号を得る (RE, S. 1202)。弁論家としては66年に P. Cornelius Sulla を選挙不正行為で告発して成功したことをはじめとする実績あり (David)。キケローは、弁論家としての彼の能力を絶賛 (Cic. Brut. 239; David)。

(Broughton, MRR, 2, p. 157; RE, XIV, S. 1199-1203; David, p. 789 f.)

*Marcius48 (M)……L. Marcius L. f. C. n. Censorinus Cos. 39 市民係法務官 (praetor urbanus) の立場であったが、43年にアントーニウスに随行してムティナの戦いに参加。42年のフィリッペーの戦いの後にマケドニア属州とアカイア属州を統治して凱旋式挙行 (RE, S. 1554)。 (Broughton, MRR, 2, p. 386; RE, XIV, S. 1554 f.)

*Marcius63 (M)……C. Marcius C. f. C. n. Figulus Cos. 64 63年のカティリーナの陰謀を鎮圧するにあたり、キケローと協力 (Cic. Phil. 2, 1; Ad Att. 12, 21, 1; RE, S. 1560)。 (Broughton, MRR, 2, p. 161; RE, XIV, S. 1559 f.)

*Marcius75 (M, O)……L. Marcius Q. f. Q. n. Philippus Cos. 91 100年のサートゥルニウスに対する戦いに参加するなどの軍歴あり (RE, S. 1562 f.)。法廷弁論家としての彼をキケローは称揚 (Cic. Brut. 207; David)。86年に若き日のポンペイウスをおそらく公蔵入略取罪 (peculatus) の裁判において弁護するなど、民刑事事件の弁護実績多数 (まず David; RE, S. 1567 f. を参照)。 (Broughton, MRR, 2, p. 20; OCD3, p. 923; RE, XIV, S. 1562-1568; David, p. 732 f.)

*Marcius76……L. Marcius L. f. Q. n. Philippus Cos. 56 (Broughton, MRR, 2, p. 207; OCD3, p. 923; RE, XIV, S. 1568-1571)

*Marcius77 (M)……L. Marcius L. f. L. n. Philippus Cos. suff. 38 34年から33年頃にかけてヒスパーニア属州を統治し、33年に凱旋式挙行 (OCD3; RE)。 (Broughton, MRR, 2, p. 390; OCD3, p. 923; RE, XIV, S. 1571 f.)

*Marcius92 (M)……Q. Marcius Q. f. Q. n. Rex Cos. 68 67年に海賊退治のために執政官代理としてキリキア属州に派遣され, *imperator* の称号を得る。実践で活躍したという記録は残されていないというが (RE, S. 1585), ここでは軍事活動をしたものとして扱う。(Broughton, MRR, 2, p. 137; OCD3, p. 923; RE, XIV, S. 1583-1586)

*Marcius…… - Marcius - f. - n. Cos. suff. 36 (Broughton, MRR, 2, pp. 137, 399)

*Marius14 (M)……C. Marius C. f. C. n. Cos. 107, 104, 103, 102, 101, 100, 86 かのマリウス。133年にスキープオー Cornelius Scipio Aemilianus Africanus のもとでヌマンティア攻略に参加したことに始まる赫々たる戦歴は周知の事柄。ギリシア的教養や都市的なものとは無縁 (RE, S. 1369)。(Broughton, MRR, 2, p. 53; OCD3, p. 925; RE, Supb. Bd. VI, S. 1363-1425)

*Marius15 (M, †)……C. Marius C. f. C. n. Cos. 82 かの小マリウス。90年に父のマリウスと共に同盟市戦争に従軍 (RE, S. 1812)。その後も父と行動を共にして内乱に関わる (RE, S. 1813)。82年にスッラ派に捕らえられ, 捕囚として死亡。(Broughton, MRR, 2, p. 65 f.; OCD3, p. 926; RE, XIV, S. 1811-1815)

*Memmius10……C. Memmius C. f. L. n. Cos. suff. 34 54年に, おじ M. Aemilius Scaurus の弁護のために出廷しているが (RE), デヴィッド, サムナーをはじめ諸史家は彼を弁論家とは認定しておらず, 本稿でもこれに準ずる。(Broughton, MRR, 2, p. 410; 3, p. 235; RE, XV, S. 618)

*Mucius22 (O, I, †)……Q. Mucius P. f. P. n. Scaevola Cos. 95 法学者として, また弁論家として著名 (David)。82年, マリウス派により虐殺。彼の経歴については拙著28-62頁も参照。(Broughton, MRR, 2, p. 11; OCD3, p. 999; RE, XVI, S. 437-442; David, p. 716 f.; Kunkel, HSS, S. 18)

*Munatius30 (M, O, N)……L. Munatius L. f. L. n. Plancus Cos. 42 カエサルのもとのガッリア戦役及び内乱への従軍をはじめ, 軍歴多数 (RE,

S. 545 ff.). *imperator* の称号を保持 (RE, S. 546)。弁論家としても著名 (まず, RE, S. 551の挙げる Cic. *Ad fam.* 10, 3, 3 他の典拠を参照)。(Broughton, MRR, 2, p. 357; OCD3, p. 1000; RE, XVI, S. 545-551)

*Nonius¹⁴ (M, N)……L. Nonius L. f. T.? n. *Asprenas Cos. suff.* 36 カエサルのもとで、46年にアフリカにて、45年にヒスパニアにて従軍(RE)。(Broughton, MRR, 2, p. 399; RE, XVII, S. 865 f.)

*Norbanus⁵ (M, O, N, †)……C. Norbanus - f. - n. *Cos.* 83 同盟市戦争に際してシキリア防衛に成功。また、南イタリアの Rhegium 市においてイタリア人の攻撃を撃退 (OCD3; RE, S. 929)。103年の平民トリブヌス在任中に、Q. Servilius Caepio のガッリアでの敗戦の責を問うてこれを訴追し、有罪とする (Broughton, MRR, 1, p. 563 f.)。政治的色彩の強い訴追であり、またダヴィドをはじめ諸史家は彼を弁論家に加えていないが、本稿ではひとまず弁論家ととらえておきたい。スッラ派に捕らえられることをさけるために82年自殺 (OCD3)。(Broughton, MRR, 2, p. 62; OCD3, p. 1048; RE, XVII, S. 927-930)

*Norbanus^{9a} (M, N)……C. Norbanus C. f. Flaccus *Cos.* 38 42年に、アントーニウス及びオクターウィアーヌスの命により、ブルートゥス M. Iunius Brutus やカッシウス C. Cassius Longinus ら共和派と戦うためにマケドニアに派遣される (RE)。他にも軍歴多数。執政官を務めた後にヒスパニア属州を執政官代理として統治し、34年に凱旋式を挙行する。おそらく *imperator* 称号を保持 (RE)。(Broughton, MRR, 2, p. 390; RE, XVII, S. 1270-1272 *Nachträge*)

*Octavius²⁰ (M, O, †)……Cn. Octavius Cn. f. Cn. n. *Cos.* 87 100年のサートゥルニウスらに対する戦いに参加したものと推測される (RE, S. 1814)。執政官在任中に、集会 (*contio*) において弁論の才が認められたとキケローが明言。なお、執政官就任以前に弁論の才は認められていなかったとも言及 (Cic. *Brut.* 176; RE, S. 1815)。ダヴィドは彼を弁論家を含めないが、サムナーは含めており、ここではサムナーに従う。執政官在任中にキン

ナ派により虐殺される。(Broughton, MRR, 2, p. 45 f.; OCD3, p. 1059; RE, XVII, S. 1814-1818; Sumner, OCB, pp. 21, 105, 115)

*Octavius22 (O)……Cn. Octavius M. f. Cn. n. Cos. 76 キケローは、第一線の法廷弁論家としてではなく、(弁論家としては第二線級とキケローが考えている) 国事に関わる人物の能力として、彼の弁論に言及 (Cic. Brut. 222; RE)。したがって、ダヴィドは彼を法廷弁論家を含めていないが、サムナーは弁論家として認めているので後者に従う。(Broughton, MRR, 2, p. 92 f.; RE, XVII, S. 1818; Sumner, OCB, pp. 23, 114 f.)

*Octavius26……L. Octavius Cn. f. C. n. Cos. 75 (Broughton, MRR, 2, p. 96; RE, XVII, S. 1819)

*Papirius38 (M, O, †)……Cn. Papirius Cn. f. C. n. Carbo Cos. 85, 84, 82 87年に同盟市戦争に従軍する (RE, S. 1024)。マリウス・キンナ派の指導者の一人としてその後の内乱に関与。弁論家としては、86年に公歳入略取罪で訴えられたポンペイウスを弁護。民衆派の扇動的弁論家としてキケローは露骨に彼を拒否 (まずは David; RE, S. 1024 f. を参照。Cic. Brut. 223)。82年の執政官職在任中に、ポンペイウスによって処刑される (RE, S. 1030 f.)。 (Broughton, MRR, 2, pp. 57, 60, 65 f.; OCD3, p. 1108; RE, XVIII/2, S. 1024-1031; David, p. 749)

*Peditius1 (M, N, †)……Q. Peditius M. f. Cos. suff. 43 58-56年にカエサルの副官としてガッリアにて従軍 (OCD3; RE, S. 39)。また、45年のムンダの戦いに従軍して凱旋式を許される。補欠執政官在任中に公敵追放と処刑の任務を与えられ、その興奮と心労から死亡 (OCD3; RE, S. 40)。 (Broughton, MRR, 2, p. 336 f.; OCD3, p. 1130; RE, XIX, S. 38-40)

*Peducaeus7a……T. Peducaeus - f. - n. Cos. suff. 35 なお、彼が RE において Peducaeus3 と示される Q. Peducaeus なる人物 (RE, XIX, S. 46 f.) であったとすると40年の Perugia 攻囲戦に従軍したことになるが、ここでは RE に従って別人と考えることとする。(Broughton, MRR, 2, p. 406; RE, Supb. VII, S. 834 f.)

*Perperna5……M. Perperna M. f. M. n. Cos. 92 (Broughton, MRR, 2, p. 17; OCD3, p. 1142; RE, XIX, S. 896 f.)

*Pompeius7……Cn. Pompeius Q. f. - n. Cos. suff. 31 (Broughton, MRR, 2, p. 420; 3, p. 160; RE, XXI, S. 2055, 2287)

*Pompeius19……Sex. Pompeius Sex. f. Sex.? n. Cos. 35 (Broughton, MRR, 2, p. 406; RE, XXI, S. 2060)

*Pompeius31 (M, O, †)……Cn. Pompeius Cn. f. Sex. n. Magnus Cos. 70, 55, 52 かのポンペイウス。父の Cn. Pompeius Strabo のもとで89年に Asculum 市で従軍したことを手始めに赫々たる戦歴を誇ることは周知の事柄。弁論家としても、56年に被護者である L. Cornelius Balbus を弁護するなど、実務経験あり (まず David を参照)。ギリシアの哲学・弁論術に通じており (RE, S. 2063), 弁論家として高い評価を得ている (David)。48年にファルサーロスの戦いで敗れ、エジプトにてプトレマイオス王により暗殺されたことも有名。(Broughton, MRR, 2, pp. 126, 214 f., 233 f.; OCD3, p. 1215 f.; RE, XXI, S. 2062-2211; David, pp. 796-798)

*Pompeius39 (M, O, †)……Q. Pompeius Q. f. A.? n. Rufus Cos. 88 スッラ派の一員として88年にローマの占領に従事。抜きでた存在ではないが、キケローによって弁論家とされる (Cic. Brut. 304; RE, S. 2251)。ダヴィド、サムナーは彼を弁論家とはしていないが、本稿では RE の記述に従う。Cn. Pompeius Strabo に代わって軍を指揮するために派遣されるも、88年に部下の兵士によって殺される。(Broughton, MRR, 2, p. 39 f.; OCD3, p. 1217; RE, XXI, S. 2250-2252)

*Pompeius45 (M, O)……Cn. Pompeius Sex. f. Cn. n. Strabo Cos. 89 同盟市戦争に従軍しており、その立場は90年は副官, 89年は執政官としてであった。89年に凱旋式を挙行 (OCD3; RE, S. 2254-2257)。弁論家としては、104-103年に T. Albucius を不法利得罪の科で告発するなどの実績があり、キケローもひとまず評価する弁論家であった (Cic. Brut. 175; David)。

(Broughton, MRR, 2, p. 32; OCD3, p. 1217; RE, XXI, S. 2254-2262;

David, p. 736)

*Porcius7 (M, †)……L. Porcius M. f. M. n. Cato Cos. 89 90年の同盟市戦争においてエトルスキー人に勝利する。執政官在任中にマルシー族を攻撃するも、戦死。(Broughton, MRR, 2, p. 32; 3, p. 286; RE, XXII, S. 107)

*Postumius33 (O)……A. Postumius - f. - n. Albinus Cos. 99 キケローは彼を名声ある弁論家として称揚 (Cic. Brut. 135; RE)。なお、この人物の同定については異論がある。RE の記述では、他に全く同名の人物 A. Postumius Albinus を二人、つまり Postumius32 (RE, XXII, S. 908f.) と Postumius34 (RE, XXII, S. 909f.) とをそれぞれ別人として認める。ブロートンは Postumius32, Postumius33, Potumius34 の三者をすべて同一と認め、サムナーは Postumius32 と Postumius33 を同一人物とするが、ここではひとまず RE での扱いに準ずる。なお、Postumius32 は110年の対ユグルタ戦争に従軍経験があり、また Postumius34 は、同盟市戦争に際してスッラの副官として従軍して、配下の兵に殺されているが、RE での扱いに従った結果として本稿では弁論家であるとのみ認める。(Broughton, MRR, 2, p. 1; 3, p. 173; RE, XXII, S. 909; Sumner, OCB, pp. 19, 82-84)

*Pupius10 (M, O)……M. Pupius M. f. - n. Piso Frugi Calpurnianus Cos. 61 法務官勤務の後にヒスパーニア属州を執政官代理として統治して69年に凱旋式を挙げる。67年から62年にかけてポンペイユスの副官として従軍 (RE, S. 1988f.)。キケローの友人で、ギリシア学術の素養に優れ、弁論家としても有名でウェスタの処女達の弁護経験がある。しかし、健康上の理由で、弁論家の経歴を断念したとキケローは伝える (まずダヴィドの記述と、そこで引かれる Cic. Brut. 236 とを参照)。忍耐力の関係で弁論家から軍人に転向し、成功した希有な事例と解釈できようか。(Broughton, MRR, 2, p. 178; 3, p. 177; OCD3, p. 1280; RE, XXIII, S. 1987-1993; David, p. 771f.)

*Rutilius26 (M, †)……P. Rutilius L. f. L. n. Lupus Cos. 90 執政官在任中、同盟市戦争に従軍するも、拙劣な指揮により Tolenus 谷にて戦死。

(Broughton, MRR, 2, p. 25; RE, IA1, S. 1266 f.)

*Scribonius10 (M, O)……C. Scribonius C. f. - n. Curio Cos. 76 100年のサートゥルニウスらに対する戦いに参加。88年よりスッラのもとで東方遠征に従軍 (OCD3; RE, S. 862 f.)。76-74年にマケドニアにて軍を指揮し戦勝。凱旋式挙行。弁論家としても、経歴の初期に法廷弁論家として活動するなど、実績あり (David; RE, S. 867)。百人法廷にて Cossi 兄弟を弁護したことも (まずダヴィドと、そこで引かれる Cic. De or. 2, 98 を参照)。(Broughton, MRR, 2, p. 92 f.; OCD3, p. 1370; RE, IIA 1, S. 862-867; David, p. 750 f.)

*Scribonius20 (M)……L. Scribonius L. f. - n. Libo Cos. 34 おそらく49-48年に M. Calpurnius の指揮下、アドリア海にてポンペイユスの艦隊を指揮 (RE, S. 883)。(Broughton, MRR, 2, p. 410; OCD3, p. 1370; RE, IIA 1, S. 881-885)

*Sempronius26 (M, O)……L. Sempronius L. f. L. n. Atratinus Cos. suff. 34 アントニーウスの命で、36年にシキリアでの対 Sex. Pompeius 戦に参加し、艦隊の一部を指揮。執政官代理としてアフリカ属州を統治し、21年に凱旋式を挙行 (RE, S. 1367 f.)。弁論家として才能を認められる存在であったが、56年に M. Caelius Rufus を暴力行為の科で告発した際は失敗 (David; RE, S. 1368)。(Broughton, MRR, 2, p. 410; RE, IIA 2, S. 1366-1368; David, p. 897 f.)

*Servilius67 (M)……P. Servilius P. f. C. n. Isauricus Cos. 48, 41 カエサルとポンペイユスの間の内戦に際してはカエサル側に貢献して、カエサルに認められる。48年の執政官職在任中に法務官 M. Caelius の起こした騒乱を鎮圧。なお、呼称は Broughton, MRR, p. 272 のものに従う。(Broughton, MRR, 2, pp. 272, 370 f.; OCD3, p. 1394; RE, IIA 2, S. 1798-1802)

*Servilius93 (M)……P. Servilius C. f. M. n. Vatia (Isauricus) Cos. 79 100年のサートゥルニウスらに対する戦いに始まる赫々たる軍歴は、周知の事実。その中には二回に及ぶ凱旋式挙行が含まれる (OCD3)。(Broughton,

MRR, 2, p. 82; OCD3, p. 1395; RE, IIA 2, S. 1812-1817)

*Sosius² (M)……C. Sosius C. f. T. n. Cos. 32 アントーニウスのもとで40年に財務官として従軍か (RE, S. 1177)。37年にイェルサレムを占領し、34年に凱旋式を挙行 (RE, S. 1178)。その後もアクティウムの海戦に至るまでアントーニウスのもとで行動。後にオクターウィアーヌスによって赦免される。(Broughton, MRR, 2, p. 417; OCD3, p. 1427; RE, IIIA 1, S. 1176-1180)

*Statilius³⁴ (M, N)……T. Statilius T. f. Taurus Cos. suff. 37 Cos. 26 36年にシキリアでの Sex. Pompeius に対する戦いに従軍したことが記録に残っている最初の軍歴 (RE, S. 2200)。その後もオクターウィアーヌスのもとでの軍功が多数あり、34年には凱旋式を挙行。(Broughton, MRR, 2, p. 396; OCD3, p. 1438 f.; RE, IIIA 1, S. 2199-2203)

*Sulpicius⁹⁵ (O, I)……Ser. Sulpicius Q. f. - n. Rufus Cos. 51 法学者として解答活動・著述・教育に実績あり (拙著210頁以下も参照)。弁論家としても著名であり、活動歴あり (RE, S. 857 また拙著218-220頁も参照)。

(Broughton, MRR, 2, p. 240 f.; OCD3, p. 1455; RE, IVA 1, S. 851-857; David, p. 801 f.; Kunkel, HSS, S. 25)

*Titius¹⁸ (M)……M. Titius L. f. - n. Cos. suff. 31 43年に公敵追放されるも、私費で艦隊を仕立てて Sex. Pompeius を攻撃。36年にはアントーニウスのもとで財務官としてパルティア戦争に従軍 (RE, S. 1559 f.)。その後オクターウィアーヌス派に転向し、補欠執政官在任中にアクティウムの海戦に従軍 (RE, S. 1561 f.)。(Broughton, MRR, 2, p. 420; OCD3, p. 1532; RE, VIA 1, S. 1559-1562)

*Trebonius⁶ (M, N, †)……C. Trebonius C. f. - n. Cos. suff. 45 55-50年の間ガッリア戦役に副官として従事し、戦功を挙げる (OCD3; RE, S. 2274 f.)。その後も軍歴多数。43年、アジア属州を執政官代理として統治していたとき、Smyrna にて P. Cornelius Dolabella に殺される (OCD3; RE, S. 2280 f.)。(Broughton, MRR, 2, p. 305; OCD3, p. 1548; RE, VIA 2, S.

2274-2282)

*Tullius29 (M, O, N, †)……M. Tullius M. f. M. n. Cicero Cos. 63 かのキケロー。90-89年に Cn. Pompeius Strabo のもとで従軍。51-50年に執政官代理としてキリキア属州を統治し, *imperator* 称号を保持 (RE, S. 830; Broughton, MRR, 2, p. 24)。弁論家としての著述と実務はあまりにも著名。43年にアントーニウスの兵の手にかかって殺される (OCD3, p. 1559)。

(Broughton, MRR, 2, p. 165 f.; OCD3, pp. 1558-1564; RE, VIIA 1, S. 827 ff.; David, pp. 803-813)

*Tullius34……M. Tullius M. f. A. n. Decula Cos. 81 (Broughton, MRR, 2, p. 74; RE, VIIA 2, S. 1312)

*Valerius168 (M)……C. Valerius C. f. L. n. Flaccus Cos. 93 92年ヒスパニア属州を執政官代理として統治。その際, あるいはその後 Celtiberia 地方で叛乱を鎮圧。*imperator* の称号を得て, 81年に凱旋式挙行 (RE, S. 8)。

(Broughton, MRR, 2, p. 14; 3, p. 211; RE, VIIIA, S. 7-9)

*Valerius178 (M, †)……L. Valerius C. f. L. n. Flaccus Cos. suff. 86 87年, マリウス派の一員としてオスティアを占拠・略奪 (RE, S. 28)。86年マリウスの死後に補欠執政官となり, 対ミトリダーテース戦争を指揮するべくアジアに赴く。そこで, 自らの副官である C. Flavius Fimbria に煽動された叛乱によって85年に殺される (Broughton, MRR, 2; RE, S. 29 f.)。

(Broughton, MRR, 2, p. 53; 3, p. 212; OCD3, p. 1578; RE, VIIIA, S. 25-30)

*Valerius255……M. Valerius - f. - n. Messalla Cos. suff. 32 (Broughton, MRR, 2, p. 417; 3, p. 213; RE, VIIIA, S. 128)

*Valerius261 (M, O)……M. Valerius M. f. M. n. Messalla Corvinus Cos. suff. 31 43-42年に, カエサルの暗殺者であるカッシウス方についてフィリッピの戦いに従軍し, 敗北。後にアントーニウス, ついでオクターウィアヌスに従う。その後も軍功多数あり, 27年に凱旋式を挙行 (まず OCD3 を参照)。弁論家としても名声を享受し, Aufidia 某を弾劾した弁論,

Liburnia 某を弁護した弁論の存在が伝えられる (RE, S. 155 f.). (Broughton, MRR, 2, p. 420; 3, pp. 213, 290; OCD3, p. 1580; RE, VIIIA, S. 131-157, 2389 f.)

*Valerius266 (M, O)……M. Valerius M. f. M'. n. Messalla Niger Cos. 61 戦役の名称・時期は不明であるが、軍事トリブヌスを二度務める (RE, S. 163)。弁論家としては81年に Sex. Roscius Amerinus を弁護。また、54年に M. Aemilius Scaurus を弁護 (David)。なお、ダヴィドは、Valerius261の項で触れた Aufidia 某の弾劾弁論を彼のものとしている。(Broughton, MRR, 2, p. 178; 3, p. 214; OCD3, p. 1579; RE, VIIIA, S. 162-165; David, p. 849)

*Valerius268 (M)……M. Valerius - f. - n. Messalla Rufus Cos. 53 49年に勃発したカエサルとポンペイウス間の内戦に際しては、カエサルのもとでアフリカとヒスパーニアにて従軍し、戦功をたてる (OCD3)。(Broughton, MRR, 2, p. 227 f.; 3, p. 214; OCD3, p. 1579; RE, VIIIA, S. 166-169)

*Vatinius3 (M, N)……P. Vatinius P. f. Cos. 47 ガッリア戦役に際してはカエサルのもとで従軍し、その後47年にアドリア海で勝利を収める。執政官代理としてイリュリクムを統治。43年にブルトゥスに破れたものの42年には凱旋式を挙行 (まず OCD3 を参照)。(Broughton, MRR, 2, p. 286; OCD3, p. 1583; RE, VIIIA, S. 495-520)

*Ventidius5 (M, N)……P. Ventidius P. f. Bassus Cos. suff. 43 カエサルのもとでガッリア戦役に従軍。43年にアントーニウスの部下になる。アジアとシリアからパルティア人を駆逐した功績で38年に凱旋式を挙行するなど、軍歴赫々。なお、Picenum 地方出身でありながら軍事を通じて成功した「新人」(OCD3)。(Broughton, MRR, 2, p. 337; 3, p. 217; OCD3, p. 1587; RE, VIIIA, S. 795-816)

*Vibius16 (M, O, †)……C. Vibius C. f. C. n. Pansa Caetronianus Cos. 43 53年にカエサルのもとでガッリア戦役に従軍し、49年のポンペイウスとの内乱の際もカエサル側につく (RE, S. 1956 f.). *imperator* の称号をカエ

サルに認められる。弁論家としては、46年におそらく Q. Aelius Tubero の共同訴追者として Q. Ligarius を訴追 (David; RE, S. 1957 f.). 44年にキケローより弁論術の講義を受ける (S. 1959 f.). 執政官在任中にアントーニウスとの戦いで戦死。 (Broughton, MRR, 2, pp. 334-336; 3, p. 220; OCD3, p. 1596 f.; RE, VIIIA, S. 1953-1965; David, p. 882)

*Vinicius1 (N)……L. Vinicius M. f.- n. Cos. suff. 33 (Broughton, MRR, 2, p. 414; 3, p. 221; RE, IXA, S. 109 f.)

*Vipsanius2 (M, O, N)……M. (Vipsanius) Agrippa L. f. Cos. 37, 28, 27 43年の L. Antonius (Pietas) に対する戦いで軍功をたてる。38年にガッリアの総督として Aquitania での叛乱を鎮圧するなどの赫々たる軍歴は周知の事柄 (まず OCD3 を参照)。弁論家としては、43年にカエサルの暗殺者カッシウスを訴追 (David; Broughton, MRR, 2, p. 337)。 (Broughton, MRR, 2, p. 395; 3, p. 293; OCD3, p. 1601; RE, IXA, S. 1226-1275; David, p. 901 f.)

*Volcacius8……L. Volcacius - f.- n. Tullus Cos. 66 (Broughton, MRR, 2, p. 151; 3, p. 223; RE, IXA, S. 754-756)

*Volcacius9……L. Volcacius L. f.- n. Tullus Cos. 33 (Broughton, MRR, 2, p. 414; 3, pp. 223, 293; RE, IXA, S. 756 f., Supb., IX, S. 1838 f.)

第三節 執政官ポスト一覧と法学者・弁論家・軍人

本節では執政官などのポストとその就任者、その者の属性を年代順に記す。
年代

99 執政官	執政官	98 執政官	執政官
Antonius28	Postumius33	Caecilius95	Didius5
(M, O, †)	(O)		(M, †, N)

97 執政官 Cornelius178	執政官 Licinius61 (M, †)	96 執政官 Domitius21 (O)	執政官 Cassius57
95 執政官 Licinius55 (M, O, I)	執政官 Mucius22 (O, I, †)	94 執政官 Coelius12 (M, O, N)	執政官 Domitius26 (M, †)
93 執政官 Valerius168 (M)	執政官 Herennius10 (O)	92 執政官 Claudius302 (O)	執政官 Perperna5
91 執政官 Marcius75 (M, O)	執政官 Iulius151 (M)	90 執政官 Iulius142 (M, †)	執政官 Rutilius26 (M, †)
89 執政官 Pompeius45 (M, O)	執政官 Porcius7 (M, †)	88 執政官 Cornelius392 (M)	執政官 Pompeius39 (M, O, †)
87 執政官 Octavius20 (M, O, †)	執政官 Cornelius106 (M, †)	補欠執政官 Cornelius272 (†)	
86 執政官 Cornelius106 (M, †)	執政官 Marius14 (M)	補欠執政官 Valerius178 (M, †)	

85	執政官 Cornelius106 (M,†)	執政官 Papirius38 (M, O, †)	84	執政官 Papirius38 (M, O, †)	執政官 Cornelius106 (M, †)
83	執政官 Cornelius338 (M, O)	執政官 Norbanus5 (M, O, N, †)			
82	執政官 Marius15 (M, †)	執政官 Papirius38 (M, O, †)	独裁官 Cornelius392 (M)		
81	執政官 Tullius34	執政官 Cornelius134 (M)	独裁官 Cornelius392 (M)		
80	執政官 Cornelius392 (M)	執政官 Caecilius98 (M)	独裁官 Cornelius392 (M)		
79	執政官 Servilius93 (M)	執政官 Claudius296 (M, †)	独裁官 Cornelius392 (M)		
78	執政官 Aemilius72 (M)	執政官 Lutatius8 (M, O)	77	執政官 Iunius46 (M, O)	執政官 Aemilius80 (M)

76	執政官 Octavius22 (O)	執政官 Scribonius10 (M, O)	75	執政官 Octavius26 (O)	執政官 Aurelius96 (O)
74	執政官 Licinius104 (M, O)	執政官 Aurelius107 (M)	73	執政官 Licinius109 (M, O)	執政官 Cassius58 (M)
72	執政官 Gellius17 (M, O)	執政官 Cornelius216 (M, O)	71	執政官 Cornelius240 (O, †)	執政官 Aufidius32
70	執政官 Pompeius31 (M, O, †)	執政官 Licinius68 (M, O, †)	69	執政官 Hortensius13 (M, O)	執政官 Caecilius87 (M, O)
68	執政官 Caecilius74 (M)	執政官 Marcius92 (M)	67	執政官 Calpurnius63 (M, O)	執政官 Acilius38 (M, O)
66	執政官 Aemilius62	執政官 Volcacius8	65	執政官 Aurelius102 (O)	執政官 Manlius79 (M, O)
64	執政官 Iulius143 (M)	執政官 Marcius63 (M)	63	執政官 Tullius29 (M, O, N, †)	執政官 Antonius19 (M)

62	執政官 Iunius163 (O)	執政官 Licinius123 (M)	61	執政官 Pupius10 (M, O)	執政官 Valerius266 (M, O)
60	執政官 Caecilius86 (M, O)	執政官 Afranius6 (M, N, †)	59	執政官 Iulius131 (M, O, †)	執政官 Calpurnius28 (M, O)
58	執政官 Calpurnius90 (M)	執政官 Gabinus11 (M)	57	執政官 Cornelius238 (M, †)	執政官 Caecilius96 (M, O)
56	執政官 Cornelius228 (M, O)	執政官 Marcius76	55	執政官 Pompeius31 (M, O, †)	執政官 Licinius68 (M, O, †)
54	執政官 Domitius27 (M, O, †)	執政官 Claudius297 (M, O)	53	執政官 Domitius43 (M)	執政官 Valerius268 (M)
52	執政官 Pompeius31 (M, O, †)	執政官 Caecilius99 (M, O, †)	51	執政官 Sulpicius95 (O, I)	執政官 Claudius229 (O, †)
50	執政官 Aemilius81 (O)	執政官 Claudius216			

49	執政官 Claudius217 (M)	執政官 Cornelius218 (M, O, †)	独裁官 Iulius131 (M, O, †)		
48	執政官 Iulius131 (M, O, †)	執政官 Servilius67 (M)	独裁官 Iulius131 (M, O, †)		
47	執政官 Fufius10 (M, N)	執政官 Vatinius3 (M, N)	独裁官 Iulius131 (M, O, †)		
46	執政官 Iulius131 (M, O, †)	執政官 Aemilius73 (M)	独裁官 Iulius131 (M, O, †)		
45	執政官 Iulius131 (M, O, †)	補欠執政官 Fabius108 (M, O)	補欠執政官 Trebonius6 (M, N, †)	補欠執政官 Caninius9 (M)	独裁官 Iulius131 (M, O, †)
44	執政官 Iulius131 (M, O, †)	執政官 Antonius30 (M, O, †)	補欠執政官 Cornelius141 (M, O, †)	独裁官 Iulius131 (M, O, †)	
43	執政官 Vibius16 (M, O, †)	執政官 Hirtius2 (M, O, N, †)	補欠執政官 Iulius132 (M, O)	補欠執政官 Peditius1 (M, N, †)	

補欠執政官		補欠執政官	
Carrinas2		Ventidius5	
(M)		(M, N)	
42 執政官	執政官	41 執政官	執政官
Aemilius73	Munatius30	Antonius23	Servilius67
(M)	(M, O, N)	(M, O)	(M)
40 執政官	執政官	補欠執政官	補欠執政官
Domitius43	Asinius25	Cornelius69	Canidius2
(M)	(M, O, N)	(M, O, N)	(M, N, †)
39 執政官	執政官	補欠執政官	補欠執政官
Marcus48	Calvisius13	Cocceius3	Alfenus8
(M)	(M, N)	(M, N)	(I, N)
38 執政官	執政官	補欠執政官	補欠執政官
Claudius298	Norbanus9a	Cornelius197	Marcus77
(M, O)	(M, N)		(M)
37 執政官	執政官	補欠執政官	
Vipsanius2	Caninius4	Statilius34	
(M, O, N)		(M, N)	
36 執政官	執政官	補欠執政官	補欠執政官
Gellius18	Cocceius13	Nonius14	Marcus
(M, †)	(M, N)	(M, N)	

35	執政官 Pompeius19 (M, O)	執政官 Cornificius5 (M, O)	補欠執政官 Cornelius	補欠執政官 Peducaeus7a
34	執政官 Antonius30 (M, O, †)	執政官 Scribonius20 (M)	補欠執政官 Sempronius26 (M, O)	補欠執政官 Aemilius82 (M)
	補欠執政官 Memmius10	補欠執政官 Herennius13		
33	執政官 Iulius132 (M, O)	執政官 Volcacius9	補欠執政官 Autronius6 (M)	補欠執政官 Flavius18
	補欠執政官 Fonteius20	補欠執政官 Acilius16	補欠執政官 Vinicius1 (N)	補欠執政官 Laronius2 (M, N)
32	執政官 Domitius23 (M, O)	執政官 Sosius2 (M)	補欠執政官 Cornelius32	補欠執政官 Valerius255
31	執政官 Iulius132 (M, O)	補欠執政官 Valerius261 (M, O)	補欠執政官 Titius18 (M)	補欠執政官 Pompeius7

第四節 集計データ

本節では、対象期間全体の数字について総計表（表1）、執政官ポストなどの重複就任者一覧（表2）、法学者・弁論家・軍人の重複関係一覧（図1）の順に記す。

表1 総計表（B.C. 99-31）

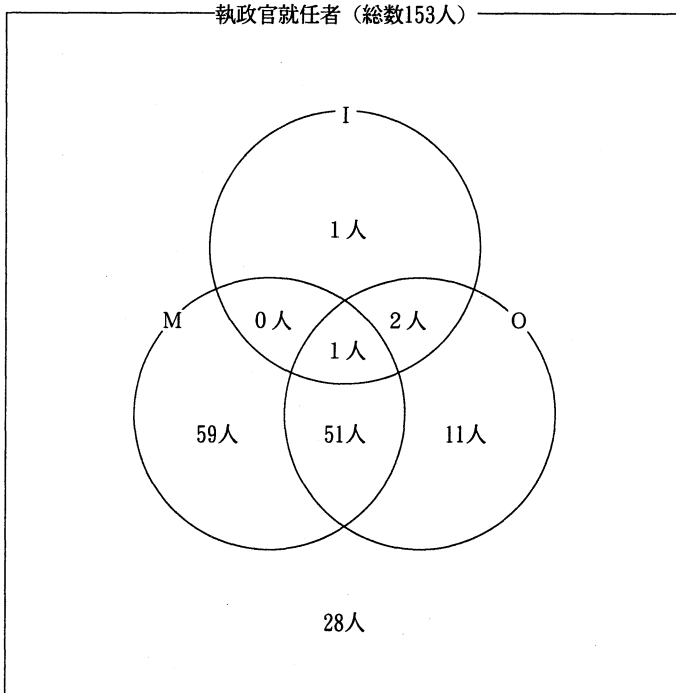
執政官などのポスト数	182
重複就任ポスト数	29
就任者数	153
法学者の就任者（重複者を含む総計）	4
弁論家の就任者（重複者を含む総計）	65
軍人の就任者（重複者を含む総計）	111
軍人兼弁論家の就任者	51
法学者兼弁論家の就任者	2
法学者兼軍人の就任者	0
法学者兼弁論家兼軍人の就任者	1
横死者	36
新人	25

表2 執政官ポストなどの重複就任者一覧⁽³⁾

人名	回数
Aemilius 73	2
Antonius 30	2
Cornelius 106	4
Cornelius 392	6
Domitius 43	2
Iulius 131	11
Iulius 132	3(13)
Licinius 68	2
Papirius 38	3
Pompeius 31	3
Servilius 67	2

総計11人（重複ポスト数29）

図1 法学者・弁論家・軍人の重複関係一覧



第三章 結果の分析

軍人・弁論家の法学者に対する数的優勢及び軍人と弁論家の重複傾向

まず、表1の集計結果を一見して明らかなことであるが、法学者が4人に対して弁論家が65人、軍人が111人と、弁論家の法学者に対する圧倒的な数的優位、さらに軍人の弁論家に対する数的優位が指摘できる。しかし、図1

(3) カッコ内は対象期間外のポストを含めた総就任回数を示す。この表は対象期間内に2回以上執政官などに就任した者の一覧であり、たとえ執政官などに複数回就任したことのある者であっても、対象期間内の就任が1回にとどまる者は含まれない。

の重複関係を見ると、法学者、弁論家、軍人のいずれにも認定されない者が28人あり、出自や庇護関係のおかげであろうか、これらの努力を必要とせず
に執政官職につけた可能性を推測させる。そして、図1を一見すると分かる
ように、法学者が軍人を兼ねる割合が4人中1人で25.0%と低いのにに対して、
軍人の総数111人のうち軍人兼弁論家と三者を兼ねる者は計52人で約46.8%
と弁論家の軍人との重なりが見えてきたようである（以下、パーセンテージ
は小数点以下2桁を四捨五入）。弁論家の総数65人のうち軍人兼弁論家と三者
を兼ねる者とは計52人で、割合はさらに多くなって80.0%となる。この結果
をどのように解釈すればよいのだろうか。次項で検討してみよう。

法学者・弁論家の養成状況と数格的差

ポーマンの指摘によれば、法学者が軍人を兼ねない傾向は、共和政末期以
前のローマにもすでに見られたということである。当時、法学はひとつの専
門として確立しており、それ自身の追究によってのみでも執政官への道筋を
拓くことができるものであり、また逆に他との兼務を容易に許すものではな
かった。⁽¹⁾本稿の対象とする共和政末期に至っても、法学者が軍人を兼ねない
傾向が続くわけだが、その理由の一つには、高度化した法学を修得して法学
者として認められるためのハードルが相当高いことがあったと推測される。
法学者となることが難しいということには、共和政末期に修得内容がさらに
高度化したという側面と法学者の養成方法が少人数教育に終始したという側
面の両方がある。当時、法学者を志望する者は訴訟採決十人官（*decemviri
stlitibus iudicandis*）などの下級政務官職で実務経験を積むとともに、すでに
名声を確立した法学者の傍らにあって彼の解答活動他の実務活動を聴講する
ことで法学を学んだという⁽²⁾が、元首政期まで続いたというこの方法が法学者
の大量生産を妨げたということは明らかであろう。法学が、いかにローマ市

(1) Bauman, LRP, p. 3f.

(2) Atkinson, pp. 36-43; Kodrebski, S. 187-189 マルー「教育史」348頁 ロー
マにおける法学教育の先行研究を知る端緒として、まず Kodrebski, S. 177を参照。

民の必須の素養といわれよう⁽³⁾と、職業的学識者のレベルでいえば、法学者は比較的少数の高度な専門家であり続け、しかもその多くは共和政末期に政治的成功を求めず法学の実務に従事していた⁽⁴⁾。このような事情は、法学者兼軍人の数が少ないことに加えて法学者の絶対数が少ないことをも説明するものであろう。

それに対して、弁論家の総数と、軍人兼弁論家の数が多いことから弁論家になることは比較的敷居が低かったように推測される。弁論術は、ギリシアの語学と教養が重要な地位を占めていた当時の中等教育と近接した位置づけにあった。そこで、ローマの法学者よりは多数存在したであろうギリシア人及びローマ人の弁論術教師から、職業的実践をねらいとしながらも高度の教養教育としての性格も併せ持つかたちで弁論術の教授を受け、そのことにより（本稿で基準にした広い範囲での）弁論家の称号を得ることができたのである⁽⁵⁾。また、ローマ土着の考え方に根ざしつつ達成された同時代のローマ法学の体系化とは別の意味で、弁論術はギリシア由来の体系性を保持しており、多くの学習者が修得するには明らかに有利であったと思われる⁽⁶⁾。そして、そもそも執政官就任者にとっては公的な場での弁論は必須のものと想像されるので、弁論術の素養を備えた者が彼らの中に多いのはある意味で当然のこと

(3) まずマルー「教育史」291頁と Kodrebski, S. 185 f. とを参照。

(4) 拙著11-20頁をまず参照。

(5) ローマの教育におけるギリシア・ラテン弁論術の位置づけについて、まず南川「教育」162-163, 166-168頁とマルー「教育史」295, 304-306頁を参照。なお、その意味で、より精密な議論を構築するためには、単に教養あるいはその延長として弁論術を修めたというレベルと、政治的な場での弁論に優れていたというレベル、法廷弁論家として実務を確立したというレベルなどを下位区分することが将来必要かもしれない。

(6) この点については詳しく論ずる余裕がなく、今後より深く検討することが筆者の課題であるが、植松編「レトリック」所収の吉原達也「キケロの弁論術教科書——『構想論』における論証のトポスと共通トポス——」83-108頁及び平野敏彦「キケロ『トピカ』についての覚書——ローマにおける弁論家と法学者——」109-113頁を、そのイメージを知るためのみちびきとすることができると考える。なお、ローマ法学の体系化という問題については拙著133頁以下も参照。

であっただろう。

新人における軍人の優勢

新人に焦点を当てると、新人が全部で25人、その内で軍人兼弁論家が8人と軍人のみの者が15人、そして法学者が1人である。軍人が占める割合は、前二者をあわせて25人中の23人（92.0%）と、執政官就任者の全体集団中にしめる軍人の割合（153人中の111人で72.5%）を、大きく上回る。新人に限って言えば、軍功が執政官職を得るためにかなり有効な手段であったことをうかがわせる。新人集団という母集団が小さいのであまり意味はないが、法学者も、新人集団中にしめる割合は25人中1人で4.0%と、全執政官就任者153人中にしめる法学者4人の割合2.6%に比べて相対的にはウェイトが重くなる。

政治的成功と身体的危険

また、執政官就任者の中には横死者が36人で23.5%見られる。法学者中の横死者も4人中1人で25.0%に上る。このことは、法学者の多くが身体的危険を伴う政治的成功を追い求めるのではなく、自発的に脱政治化して法学の実務に専心した⁽⁷⁾という筆者の議論を補強するものであろう。

むすびにかえて

以上、大枠の議論となったが、基本的な参考書他に拠りつつデータの整理を試み、共和政末期ローマにおける法学者の政治的経歴を考える際に問題となる周囲の状況を見通してみた。筆者は、今後さしあたり紀元前二世紀以前における法学の状況と法学者の活動のあり方を検討してみたいと企図しているが、同様の手法で、さらにこの時代以前の状況を検討することは将来的に必要であると考えている。

(7) 拙著11-12頁を参照。